論　文

異年齢保育における社会性の発達に関する一考察

島　田　知　和

A study of the development of sociability behaviors in multi aged child care

Tomokazu SHIMADA

【要　　旨】

本研究の目的は３，４，５歳児の異年齢クラスを観察し，異年齢保育において子どもたちにどのような発達的な変化がみられるかを明らかにすることであった。取り上げられた事例を「活動に対する要求の組織化の分類表」「仲間に対する要求の組織化の分類表」を用いて分析した結果，観察当初は「する―される関係」だった年長児と年少児の関係が，異年齢クラスで共に生活をしていく中で，お互いに要求を出し合いながら，協力して当番活動に取り組んだり，一緒に遊んだりする「横並びの関係」へ発展していく姿がみられた。今後の課題として，今回使用した「活動に対する要求の組織化の分類表」「仲間に対する要求の組織化の分類表」の各項目の再検討の必要性が示唆された。

【キーワード】

異年齢保育　　集団づくり　　横並びの関係

Ⅰ．問題と目的

1990年に合計特殊出生率が1.57となった「1.57ショック」以降，エンゼルプランなど様々な少子化対策が講じられたが，その後も子どもの出生数は減少傾向にある。2013年には，出生数は102万9800人を記録し，合計特殊出生率も若干の回復はみられたものの1.43にとどまっている（全国保育団体連絡会・保育研究所，2014）。また，2008年のリーマンショックの影響により，日本でも失業率が上昇し，就労する母親の増加から，保育園にはこれまで以上に長時間保育が求められるようになった。一方で，母親の就労状況によって，子どもたちの登園時間や帰宅時間にばらつきが生じ，子どもたち一人ひとりの安定した生活を保障することが困難となり，特に年齢別での活動が取り組みにくいものになっている。

幼稚園でも教育時間の終了後に，希望者を対象に預かり保育を実施する園が増加している。1993年の調査によれば，私立幼稚園では全体の29.5％，公立幼稚園では全体の5.2％だったものが2012年の調査では，私立幼稚園は94.2％，公立幼稚園は59.7％といずれも上昇している（全国保育団体連絡会・保育研究所，2014）。また，預かり保育だけではなく，就労する母親への子育て支援の一環として，３歳未満児の受け入れを積極的に行う幼稚園も増加している。

このように，少子化の進行，就労する母親の増加等から保育園・幼稚園では年齢の異なる子どもたちが同じ部屋で生活をしたり，同じ活動を行うといった異年齢保育に関心が高まっている（伊藤，1998；仲野・後藤，2002)。

すでに，1970年代頃から異年齢保育の意義やその問題が実践上の重要な課題として取り上げられている（渡邉，2012)。子どもの数が少なく年齢別のクラス編制ができなかったため「やむを得なく」実施する保育園がある一方で，年齢別でクラス編成が可能だが，意図的にたてわり保育をしている保育園があり，現在に至るまでに多くの研究者，実践者によって実践知が積み上げられている（藤下，2014；宮里，2001；島田2014)。

例えば，西岡（2014）では，３，４，５歳児の異年齢集団が協力し，話し合いを重ねながら劇をつくっていく実践が報告されている。そこでは年長児と年少児との「頼る―頼られる関係」だけでなく，年齢に関係なく共に助け合いながら，協力して一つの劇を作り上げていく子どもの姿が報告されている。その他にも，３歳未満児を含めた異年齢保育の実践もなされており，そこでは保育園を「第２のおうち」として，ゆっくりとした時間の中で，子どもたち一人ひとりが安心して暮らす事ができる保育を目指している（鍋田，2012)。

就学前の子どもの保育は，これまで年齢別のクラス編成を行い，それぞれの発達段階に応じた保育・教育を行うことが一般的なものとして考えられてきた。現在，少子化の進行や母親の就労状況の変化等から保育現場は多様な保育要求に応えていかなければならない状況に置かれている。渡邉（2012）は異年齢保育を「方法」「形態」と述べており，このように保育が多様化していく中で，子どもたち一人ひとりの発達において何が最も必要か，子どもにどのように発達してほしいのか，保育者の願いを中心に置き，子どもたちの発達に応じた保育形態，保育方法を検討していく必要があり，その一つに異年齢保育も位置づけられているといえる。

そこで本研究では，春から秋にかけて約８か月の間，子どもたちの姿を捉えた事例を詳細に分析・考察し，異年齢保育において，子どもたちにどのような発達的な変化がみられるか，検討・分析を行うことを目的とする。

仮説として，先行研究（夏堀，2008）において指摘された「する―される」関係が，異年齢クラスで生活を共にし，一緒に当番活動に取り組んだり，遊んだりする中でお互いに要求を出し合うことで「横並びの関係」に発展していくと考えられる。

Ⅱ．方法

対象児

大分県立病院内コスモス保育園（現社会福祉法人なかよしコスモス保育園）の３，４，５歳児の異年齢クラスから４歳児（男児４名，女児８名，計12名，内女児２名は途中入園）を対象として取り上げた。４歳児を対象とした理由は，３・４・５歳児の中で，中間的な位置であり「世話する―される関係」「模倣する―される関係」のどちらの側の立場にもなれるからである。

観察記録及び場面

使用した記録は平成23年４月21日から11月29日までのものを使用した。観察場面は週２回，９時から12時30分まで，毎日観察できる当番活動や遊び場面を取り上げた。

記録方法

デジタルビデオカメラによる録画，子どもの様子で気づいたことをメモに随時記録した。また，保育者の発話もあわせて記録した。

分析方法

分析には島田（2014）で取り上げた「活動に対する要求の組織化の分類表」（表１）「仲間に対する要求の組織化の分類表」（表２）に修正を加えて用いた。この分析表は山本・中川（1988）が作成した「当番活動への要求の発展」「仲間意識・組織的行動の広がり」をもとに，臼杵ら（2002）などの研究において各表の項目が追加，精選されたものである。

この分析表をもとに，子どもたちの観察記録

から「誰が」「いつ」「どこで」「誰に」「どのような」要求がみられたかを詳細に分析することによって，子どもの要求がどのように育っているかを検討した。

表１．活動に対する要求の組織化の分類表

１．友だちや保育者に促されて要求を出す
２．自分から活動をしたい要求を出す
３．保育者に促されて活動をする
４．友だちに促されて活動をする
５．保育者に促されて友だちの手伝いをする
６．自分の思いのみで行動する
７．保育者・年長児にどうしたらよいか聞く
８．見通しを持った行動をする
９．活動を円滑にすすめようとする

表２．仲間に対する要求の組織化の分類表

１．自分のグループのメンバーを認識する
２．他のグループのメンバーを認識する
３．自分のグループを意識するようになる
４．友だちの要求を受け入れる
５．グループ意識が高まる
６．他のグループを意識するようになる
７．クラス全体を意識する
８．クラス意識の高まり

Ⅲ．結果及び考察

対象児の性別，生年月日及び月齢を表３に，４月当初の子どもたちの姿を年齢ごとに表記したものを表４に示した。なお，３歳児は「３A，３B，３C…」４歳児は「４A，４B，４C…」５歳児は「５A，５B，５C…」で表記する。

次に，観察された事例を春から秋にかけて期ごとに取り上げ，事例に基づいて，子どもたちの姿を「活動に対する要求の組織化の分類表」（表１）「仲間に対する要求の組織化の分類表」（表２）を用いて分析した。

今回の研究で取り上げた事例は５つである。表５の事例は，４月に記録されたもので，４歳児が５歳児から遊び方を教えてもらったり，自分が作ったものを見てもらう場面，表６の事例は，４月に記録されたもので，泣いている３歳児に対して４歳児が声をかける場面，表７の事例は，５月に記録されたもので，４歳児と５歳児がお互いに要求を出し合いながら話し合う場面，表８の事例は，８月に記録されたもので，４歳児と３歳児がそれぞれ思いを出し合いながら一緒に遊ぶ場面，表９の事例は，10月に記録されたもので，４歳児と５歳児が，当番活動でお互いに気づいたことを注意し合う場面，表10の事例は，11月に記録されたもので，４歳児と５歳児が，お互いに要求を出し合いながら自分たちの遊びを展開していく場面の記録である。

表３．対象児の性別，生年月日

名前	性別	生年月日	月齢
４A	男	H18. 5. 22	４歳10か月
４B	女	H18. 6. 2	４歳９か月
４C	女	H18. 6. 19	４歳９か月
４D	女	H18. 7. 10	４歳８か月
４E	男	H18. 9. 1	４歳７か月
４F	女	H18. 9. 15	４歳６か月
４G	男	H18. 9. 17	４歳６か月
４H	女	H18. 9. 21	４歳６か月
４I	女	H18. 9. 24	４歳６か月
４J	男	H18. 10. 19	４歳５か月

表４．４月当初の子どもたちの姿

年齢	4月当初の姿
３歳児	うさぎぐみ（２歳児クラス）からきりんぐみ（３，４，５歳児クラス）に進級したばかりで新しい生活に慣れていない様子で，生活への見通しがまだ持てていない。そのため，給食準備時間や自由遊びの終了時間等に次の活動へ移行することが難しく，そのまま前の活動を続ける姿が多くみられた。
４歳児	泣いている３歳児に声をかけたり，保育室に戻らない３歳児を迎えに行ったりするなど，３歳児のことを気にかけており，お世話をする姿がみられた。また，昨年度から一緒に生活をしていた５歳児とは，遊び方を教えてもらったり，自分たちも模倣して遊んだりする姿がみられた。
５歳児	年長児になり，グループのリーダーを行うなどクラスの中心になっている。当番活動では年少児に教えたり，指示を出しながら行っていた。また，自由遊びや課業の時間でも中心になることが多く，年少児たちに教えたり，模倣される姿がみられた。

表５．事例１　４歳児と５歳児の「教える―教えられる」関係

H23. 4. 28

	子どもの姿	要求 活動	要求 仲間
	クラス全員で外に出て，保育園に咲いている花を使って色水をつくって遊んでいる。４Ａ児が自分でつくった色水を５Ａ児に見てもらおうと声をかけている。４Ｅ児も５Ａ児のそばに来て，５Ａ児からよく色が出る方法を教えてもらっている。		
４Ａ児	５Ａちゃん。５Ａちゃん。ねえねえ，５Ａちゃんおもしれぇ。見よって（５Ａ児の方に駆け寄り，自分が作った色水を見せる）。		
５Ａ児	ほんとや，それは花が多すぎるけんやな。おれなんか見よって。もう色がついちょん（４Ａ児の色水を見た後，自分の色水を見せる）。		4
４Ａ児	４Ａ，花いっぱい入れた。		4
５Ａ児	花いっぱい入れた方がでやすいんで。ねえねえ茎を入れよう。ねえねえお助けん時は茎を入れよう。こういう茎を。茎を何個くらいか入れたら早くできるよ（自分の手に持っていた茎を４Ａ児に渡す）。		
４Ｅ児	ならん(別の場所で色水を作っていた４Ｅ児が，５Ａ児に自分の色水を見せながら尋ねる)。	7	
５Ａ児	茎を入れよう。茎を。花と茎を入れよう。茎を。あと花をもうちょっと（自分の色水を作りながら４Ｅ児に言う）。		4
４Ｅ児	ねえ，どんなの（５Ａ児の色水を見ながら尋ねる）。	7	
５Ａ児	作ったことないん。もうちょっと花入れたら。おれはチューリップ入れたらさ，こんな色ができた（４Ｅ児に自分が作った色水を見せる）。		4
４Ａ児	５Ａちゃん見てみて。ちょっと色がでてきた（笑顔で５Ａ児に自分の色水を見せる）。		

１．４歳児と５歳児の「教える―教えられる関係」

表５に示したとおり，４Ａ児，４Ｅ児と５Ａ児が保育園にあるチューリップなどの植物を使って，色水をつくって遊んでいる場面記録である。４Ａ児は自分が作った色水を５Ａ児に見てもらいたいという思いから，場面記録のような姿がみられたと考えられる。５Ａ児から教えられたことを受けて，色が出たことを笑顔で５Ａ児に報告する姿もみられた。また，４Ｅ児は５Ａ児へ，色がよく出る方法を自分から尋ねており「７．保育者・年長児にどうしたらよいか聞く」（表１）姿がみられる。５Ａ児はこの要求を受け入れ４Ｅ児へ，より色を出すためのアドバイスをしており「４．友だちの要求を受け入れる」姿がみられる。

５Ａ児は，４歳児２人の「自分が作ったものを見てもらいたい」「作り方を教えてほしい」といった要求を受け入れ，作ったものを見たり，それぞれに作り方を教えるなどして２人の要求を受け止めている。４Ａ児，４Ｅ児にとって，５Ａ児は一緒に遊んで，自分がつくったものを見てもらったり，遊び方を教えてもらったりする存在であり，この関係は「教える―教えられる関係」だといえる。

２．４歳児と３歳児の「世話する―世話される関係」

表６に示したとおり，この事例は給食準備時間に保育室の外へ出て，泣き出した３Ａ児に対して，４Ｂ児，４Ｃ児，４Ｄ児が保育者と一緒に声をかけている場面記録である。この事例で４歳児は，３Ａ児に対して，全員が共通して穏やかな口調で優しく声をかけている。これらの姿は，自分たちも年少児のときに，先生や年長児から世話をしてもらった経験があり，自分たちも泣いたり，困ったりしている年少児の世話をしたいという思いから，このような姿がみられたと考えられる。４Ｃ児は，うさぎ組（２歳児クラス）だった頃，自分も泣いていた話をしたり，４Ｂ児は，担任の先生に抱っこをしてもらうことを提案したりと，自分たちの今までの経験などからさまざまな理由を用いて，３Ａ児が泣き止み，保育室に戻るように声をかけている。さらに，４歳児３人が，３Ａ児が保育室にいないことに気づいた姿から，クラス全体を意識して，生活をしているといえる。表２より，保育室にいない友だちに気づく

表６．事例２　４歳児と３歳児の「世話する–世話される」関係

H23. 4. 29

	子どもの姿	要求 活動	要求 仲間
	自由遊びの時間が終わり，当番が給食の準備をしている時に，３Ａ児がテラスへ出て「ママがいい」と泣いている。気づいた４Ｂ児，４Ｃ児，４Ｄ児が担任の保育者と一緒に部屋に戻るように声をかけている。		
３Ａ児	ママがいいよ（保育園の外を見ながら座り込んで泣いている）。		
４Ｂ児	ママ今お仕事。ママが今日お迎えに来るん。３Ａちゃんきっとママ来るけん大丈夫だよ（３Ａ児へ母親が迎えに来るかどうか穏やかな口調で尋ねる）。		
４Ｄ児	大丈夫だよ（そばに来て穏やかな口調で話しかける）。		7
４Ｃ児	きっと来るけんね（穏やかな口調で話しかける）。		7
４Ｄ児	きっと来るけん泣きやんで（穏やかな口調で話しかける）。		7
４Ｂ児	Ｉ先生優しいやろ		
４Ｄ児	そうよ。		
４Ｂ児	涙ふきよ（ティッシュを渡す）。		7
４Ｃ児	前だって，４Ｃちゃんたちがうさぎ組さんの時にわぁんって泣いちょったんで。		
４Ｂ児	ほらＡ先生もおるよ，あそこに。		
４Ｄ児	３Ａちゃんもママに会えるけん，泣きやんで。		7
３Ａ児	ママ，ママ，ママ。		
４Ｂ児	そんなに泣かん。ね。３Ａちゃん。Ｉ先生に抱っこしてもらえば。		
３Ａ児	ママがいい。		
４Ｂ児	お部屋に入ろう。	8	7

といった「７．クラス全体を意識する」が育っていると考えられる。

また，保育室に呼び戻そうとしている姿から「給食を準備している時間は，当番以外は椅子に座り保育室で過ごす」という保育園における活動の見通しを持っており，表１の活動に対する要求の組織化の分類表「８．見通しを持った行動をする」が育っているといえる。年少児の世話をするためには，自分たちが保育園における生活の流れを把握し，見通しを持った行動ができることが求められる。

３．４歳児と５歳児の「お互いに要求を出し合い、受け止め合う関係」

表７に示すとおり，４Ｄ児，４Ｅ児，４Ｈ児，４Ｊ児と５Ｂ児が，それぞれ自分たちの要求を出し合いながら，散歩に弁当を持っていくかどうか話し合いをしている場面記録である。この事例では，雨が降ったり止んだりと不安定な天気の中，もし弁当を持って行ったらどうなるか，いざ食べるときに雨が降った場合どのようにしてみんなで食べるかなど，さまざまなイメージを膨らませながらお互いに要求を出し合いながら，話し合いをしている。４歳児，５歳児共にお互いの要求を聞き「でもさ，でもさ…」と友達の要求を受け止めながら，話し合いを進めている。「４．友だちの要求を受け入れる」（表２）姿が年齢に関係なくみられる事例である。４歳児と５歳児は昨年度から生活を共にし，当番活動や課業の中で話し合いを重ねてきた。同じクラスで，生活の中の困りや活動を共有し，異年齢クラスのみんなで要求を出し合いながら問題を解決してきたからこそ，このような民主的な「横並びの関係」がみられたと考えられる。

４．４歳児と３歳児の「同じ場所で一緒に遊ぶ関係」

表８に示すとおり，この事例は４歳児と３歳児が，砂山や水路を一緒につくる中で，年齢に関係なくお互いに思いを出し合いながら，一緒に遊んでいる場面記録である。４歳児の３人は「砂山と水路を作る」というイメージを共有しながら遊びを展開しているが，３歳児の２人は「水をかけたい」「砂を掘りたい」など自分がやりたいという思いが強く，このように思いの

表７．事例３　４歳児と５歳児の「お互いに要求を出し合い，受け止め合う関係」

H23. 5. 12

	子どもの姿	要求 活動	要求 仲間
	散歩に出発する前に，雨が降ったり止んだりと不安定な天気だったため，散歩にお弁当を持っていくかどうかグループ毎で話し合っている。		
担任	きりんさん今から，スポーツパークに行きます。グループさんでお弁当を持っていくかどうか，お弁当を持っていかない方がいいか話しあってください。		
４Ｊ児	でも，人数が多いよな。		
５Ｂ児	お弁当持っていきたいな。	2	
４Ｊ児	それか，二つ重なってもいいやん。自分のとことかで，みんなで分かれて食べれば。		4
４Ｅ児	いやだ。		
５Ｂ児	草の上とかで何人か食べてからさ，なんかベンチみたいなところで食べてさ。		4
４Ｊ児	それかさ，お家みたいなところで，みんなさひっついちょったりするとさ，誰かとかがさ，４Ｊくんのところで座ればいいやん。それかみんなのところで食べるか。		4
４Ｅ児	でもさ，４Ｊくんのも濡れるかもしれんやん。		4
５Ｂ児	でも，赤ちゃんに取られるよ。お弁当を。		4
４Ｄ児	でもさ，赤ちゃん外来れんよ。		4
５Ｂ児	来れる赤ちゃんもおるよ。たぶん。		4
４Ｅ児	来れるやろ。歩いてなんか誰かの取ったらどうするん。		4
４Ｄ児	背伸びして。		4
４Ｅ児	でもさ，歩いて取ったらどうするん。		4
４Ｊ児	上がるところもいつも来よんかもしれんけん，知っちょんやろうな。		4
５Ｂ児	決まった。		
４Ｊ児	決まらん。		
５Ｂ児	持っていく。		
４Ｊ児	なんか赤ちゃんとかおらんかったらいいやん。な。		4
４Ｅ児	でもさ，赤ちゃんお弁当持ってきてないって言ったらさ，誰かの食べるかも知れんやん。		4
４Ｊ児	でも，すぐ帰るかもしれんやん。		4
５Ｂ児	でも１個やったらすぐ食べ終わるかもしれんよ。		4
４Ｊ児	４Ｊくん４個やから遅いわ。４個		4
４Ｈ児	３個。		4
４Ｅ児	３個。		4
５Ｂ児	お弁当持っていきたいな。	2	
５Ｂ児	お弁当持っていきたい人手あげて。		4
全員	はぁい。（みんな手をあげる）	2	

違いから４歳児や３歳児同士の間でいざこざがみられる。この事例では，４Ｃ児が遊びの中心になっており，３Ｂ児に「水をかけて」「水を汲んできて」と自分がイメージしたものを作るために指示を出している。この指示に対して３Ｂ児は「水をかけたい」という要求が通り，楽しそうに水をかけている姿がみられた。この姿から，お互いの遊びに対する思いは多少違うが，一つの遊び，空間の中で年齢に関係なく，要求を出し合いながら遊んでいる事例だといえる。

４Ｃ児は，遊びに対する思いに違いがあるにもかかわらず，３Ｂ児の仲間入りを拒否することなく，指示を出しながら同じ場所で一緒に遊んでいる。８月となり同じクラスで共に生活を始めて，活動を共有することによって，４歳児と３歳児の関係は単に「お世話する―される関係」だけではなく「同じ遊びを共有する関係」へと発展したと考えられる。

５．４歳児と５歳児の「お互いに注意し合う関係」

表９に示したとおり，４歳児の４Ａ児，４Ｂ児と５歳児の５Ｃ児の３人が朝の野菜切り当番のための野菜を給食室に取りに行く場面記録である。当番を始める前に，グループの友だちを

表８．事例４　４歳児と３歳児の「同じ場所で一緒に遊ぶ関係」

H23. 8. 18

	子どもの姿	要求 活動	要求 仲間
	自由遊びの時間に，４Ｃ児，４Ｊ児，４Ｅ児と３Ｂ児，３Ｃ児と担任が砂場で山や水路をつくって遊んでいる。		
４Ｊ児	こっちからお水流すけん。	2	
３Ｂ児	お山の中に水かけてもいい（ペットボトルで水を汲んできて，砂山に水をかけていいか４Ｃ児に尋ねる）	2	
４Ｃ児	すぐそしたら，壊れるやん。固めんと。（３Ｂ児の顔を見ながら，少し強い口調で拒否する）		
４Ｃ児	かして。（３Ｂ児が持っている水が入っているペットボトルをやや強引に取り，お山に水をかける）	6	
３Ｂ児	３Ｂちゃんが，３Ｂちゃんが，３Ｂちゃんが。（４Ｃ児に詰め寄りながら大きな声で言い，ペットボトルを４Ｃ児から受け取る）		
４Ｃ児	（３Ｂ児にペットボトルを何も言わずに返す）		4
３Ｂ児	ここでもいい？お水？（４Ｃ児に確認するように尋ねる）	2	3
４Ｃ児	もう後から流すんで。（３Ｂ児が水をかけようとするのを止めるように言う）		3
４Ｊ児	水はここから流すんで。（３Ｂ児に教えるように話すが，３Ｂ児は砂山や４Ｊ児に背を向けて他の場所に水をかけている）		3
４Ｃ児	まだ工事しよんけん		
３Ｃ児	（スコップを使い，砂山に砂をかける時に，４Ｊ児の手に砂をかけてしまう）		
４Ｊ児	やるなぁ。（笑いながら，かかった砂を落とす）		
担任	やるなぁ。（笑いながら話す）		
４Ｃ児	ちょっとだけ水かけて（３Ｂ児に言う）		3
３Ｂ児	（砂山に水をかける）		4
４Ｃ児	お山にいっぱい水をかけて（３Ｂ児に言う）		
４Ｃ児	（砂山を固める）		
３Ｃ児	（山に砂をかける）		
３Ｂ児	３Ｃくん（強い口調で３Ｃ児に注意する）		
４Ｃ児	３Ｃ児くんがお山に砂をかけたけん，もう一回水を汲んできて		
３Ｃ児	いいんで。いけんやん。掘るんやけん。（強い口調で言う）		
３Ｂ児	（水を汲みに行く）		
４Ｃ児	あっちに向けてぽんとして（３Ｃ児に対して少し強い口調で言う）		
３Ｃ児	（砂山とは違う場所に掘った砂をかける）		4

表９．事例５　４歳児と５歳児の「お互いに注意しあう関係」

H23. 10. 25

	子どもの姿	要求 活動	要求 仲間
	給食に使うための野菜を当番のグループが切る場面で，欠席が多く３人で行うことになった。		
５Ｃ児	せえの，さんはい。		
全員	そろったそろったえいえいお。		
４Ｂ児	今日３人やな。		
５Ｃ児	あ，ごめん（当番用の椅子を運ぶ際に４Ｂ児にぶつかり，そのまま運びながら言う）。		
４Ｂ児	いいよ（特に気にしていない様子で，椅子を運びながら言う）。		
４Ａ児	今日４Ｂちゃんがお当番。		
５Ｃ児	４Ｂちゃんがお当番。		
４Ｂ児	待って，手洗うよ（前を歩いていた５Ｃ児に呼び止めるように大きな声で言う）。	8	3
５Ｃ児	手洗ったもん（本当は洗っていないため，ばつが悪そうに小さな声で言う）。		
４Ｂ児	洗ってない。まだまだ待って。待ち。手洗ってから。		3
５Ｃ児 ４Ａ児	（５Ｃ児は給食室の前で待ち，４Ａ児は手洗い場付近で待っている）		4
５Ｃ児	４Ｂちゃん早くして。		3
４Ｂ児	はぁい。		4
全員	今日のお野菜なんですか。		

表10. 事例５　４歳児と５歳児の「お互いに要求を出し合いながら遊ぶ関係」

H23. 11. 15

	子どもの姿	要求 活動	要求 仲間
	散歩で行った公園で４Ａ児，４Ｅ児，４Ｇ児，５Ａ児，５Ｄ児，５Ｅ児，５Ｆ児，５Ｇ児が鬼ごっこをして遊んでいる。鬼を誰がするか決めている場面である。		
５Ｄ児	おにしたい人。（全員に聞こえるように大きな声で呼びかける）	8	
４Ａ児	鬼ごっこしよん人来て。（全員に聞こえるように大きな声で呼びかける）	8	
５Ｄ児	鬼したくない人手あげて。（全員に聞こえるように大きな声で呼びかける）	8	
４Ｅ児	はい，鬼したくない。（手をあげながら，５Ｄ児に向かって言う）		
５Ｄ児	鬼したい人手あげて。（全員に呼びかけるが誰も手をあげない）	8	
５Ｄ児	じゃんけんで決めようよ。	8	
４Ａ児	裏か表で分かれよう。（５Ｄ児の方を見て提案する）	8	
５Ｄ児	いいよ。		4
全員	裏か表で別れましょう。		
４Ａ児	表きて。		
５Ｄ児	４人も鬼がおる。		
５Ａ児	いやだ，鬼４人とか多すぎる		
４Ａ児	じゃあ逃げる人を４人		
５Ａ児	いいよ		4
４Ａ児	それでいいですか。（全員に聞こえるような大きな声で確認するように尋ねる）		3
５Ｄ児	なんで。		
４Ｅ児	だってむうくん早いやんか。（５Ｄ児や４Ａ児に比べると声は小さいが，はっきりと言う）		3
４Ａ児	早い人と遅い人にする。４と４で別れればいいやん。		3
５Ｄ児	４と４で別れればいいやん		3
４Ａ児	早い人こっち来て，遅い人こっち来て （５歳児５人と４Ａ児が足が速いグループに，４Ｅ児と４Ｇ児が足が遅いグループに分かれる。）		
４Ｅ児	４Ｇくんと走りたい。		
４Ａ児	じゃあこの２人が鬼やけん。		
５Ｄ児	なんで。どっちも遅いやん。		
４Ａ児	じゃあ俺と４Ｅ。		6
４Ｇ児	え，やだ（４Ａに小さな声で言う）。		
４Ｅ児	４Ｇくん入れんの（４Ａに尋ねる）。		3
担任	４Ｇくんが何か言いよんよ。何かいいたいことがあるんやない。		
４Ａ児	何。（４Ｇ児の肩を持って優しい口調で話しかける）		
４Ｇ児	僕鬼になりたい。		
４Ａ児	じゃあ３にんで鬼ね。作戦立てるぞ。（３人で輪になって笑顔で話し始める）		4

確認している姿から，仲間に対する要求の組織化の分類表「5. グループ意識が高まる」が育っているといえる。

この事例では４歳児の４Ｂ児が，当番の前には手を洗うという活動の流れがわかっており，それを行わずに，野菜を受け取りに行く５歳児の５Ｃ児に対して，呼び止めるように大きな声を出して手を洗うようにと促している姿がみられる。また，５Ｃ児も４Ｂ児に対して，給食室へ早く来るように注意をしている。このように気づいたことをお互いに言い合っている姿から，４歳児と５歳児の関係は「お互いに注意をし合う関係」だといえる。

６．４歳児と５歳児の「お互いに要求を出し合いながら遊ぶ関係」

表10に示したとおり，この事例は鬼ごっこの鬼を決めるために５歳児と４歳児が話し合いをしている場面記録である。鬼を決めるために５歳児の５Ｄ児と４歳児の４Ａ児が中心となって話し合いを進めており「8. 見通しを持った行動をする」姿がみられ，お互いに思いを出し合いながら行っている。２グループに分かれる場面でも，結果としては遅いグループに４歳児の

２人が入ってしまったが，初めから年齢で分けることなく，対等にグループ分けを行っている。なかなか４Ａ児に比べ，自分の思いを出す姿があまりみられない４Ｅ児と４Ｇ児も自分たちの要求を出している。さらにその要求を全員で受け止めようとし，どうしたら自分たちの遊びが楽しくなるか，また遊びに参加する全員が楽しく遊ぶためにはどうしたらいいか話し合いを行っている。

Ⅳ．総合考察

観察記録から得られた事例について，４歳児を中心に時系列に沿って分析・考察を行ってきた。３歳児との関係の変化，５歳児との関係の変化についてそれぞれ考察を行う。

３歳児との関係

３歳児との関係においては，４月当初は，泣いている３歳児に対して穏やかな口調で優しく声をかけ，保育室に戻るよう促すような姿がみられた。４歳児は，３歳児が部屋にいなかったり，泣いている声が聞こえたりすると，５歳児よりも早く気づき，３歳児のそばに行く姿がみられた。これは３歳児がクラスに新しく加わったことにより「7. クラス全体を意識する」（表２）が育ったと考えられる。

３歳児が加わり，新しくなったクラスの中で自分たちも担任の保育者や年長児のように年少児をお世話したいという思いから「世話する―される関係」がみられたと考えられる。また，新しいクラスの生活に慣れていない３歳児の世話ができた要因として，４歳児が「給食時間は部屋で絵本を読む」「お片づけの後はお部屋に戻る」などの保育園における１日の生活の流れがわかっており「8. 見通しを持った行動をする」（表１）が育っているからだと考えられる。

４月当初は「世話する―される関係」だったものが，同じクラスで生活を共にしていく中で，お互いに遊び活動において，要求を出し合いながら遊ぶ姿がみられるようになった。観察記録の中から，砂遊びなどを４歳児と３歳児が一緒に共有しながら，遊び活動に対してお互いに要求を出し合っている「2. 自分から活動したい要求を出す」（表１）姿が多くみられた。３歳児は遊びの中で「自分がやりたい」という思いが強く，４歳児といざこざを起こす場面がみられたが，仲間入りを拒否したり，中断することなく遊び続けていた姿から，４歳児と３歳児の関係が「同じ遊びを共有する関係」へと発展したと考えられる。

５歳児との関係

５歳児との関係においては，前年度から同じクラスで生活を共に過ごしており，４月当初から遊びや当番活動の中で，お互いに要求を出し合う姿がみられた。この関係の中でも４歳児は，遊びの中でつくり方を教えてもらったり，５歳児が中心で行っている遊びに入れてもらったりと，５歳児の提案を受け入れる姿の方が多くみられた。期が進むにつれて，４歳児自らが５歳児に遊びの中で提案をしたり，要求をする場面がみられるようになった。また，グループ内の話し合いにおいても，年齢に関係なく自分の思いを伝え合い，さらに受け止め合うような姿がみられるようになった。当番活動の中では４歳児が５歳児へ注意をするような姿もみられた。

このように，同じ保育室で同じ活動に取り組み，一緒に生活をつくりあげていく中で，年齢の違いに関係なく，安心してお互いの要求を出し合えるような関係ができたといえる。「する―される関係」や「憧れの存在」といったものから，遊びや当番活動に対してお互いに要求を出し合いながら，一緒に生活をつくっていくような「横並びの関係」へと発展したと考えられる。

今後の課題

本研究で取り上げた事例は，異年齢保育という「保育形態」の中に「集団づくり」という「保育理念・方法」を取り入れている実践である。「集団づくり」では，生活の中で生じる困りや

問題を，クラス全体がお互いの要求を出し合いながら，自分たちの力で解決していく自治的集団，つまり「横並びの関係」を目指している。また「集団づくり」では，子どもたちの発達の差や違いによって生じる矛盾を保育の原点としているため，異年齢保育のように年齢による発達の差や違いが明確な集団にこそ必要な「保育理念・方法」だといえる。子どもたちが，年齢や発達の違いをお互いに認め合いながら，共に生活をつくっていくことにこそ異年齢保育の教育的意義があると考える。

今回分析に使用した「活動に対する要求の組織化の分類表」「仲間に対する要求の組織化の分類表」はクラスの要求が組織化されていく過程から，集団の発展を考察するためにつくられたものであり，観察場面として，当番活動やグループ活動を対象としている。本研究では，自由遊び場面を観察対象としたため，今後の課題として，自由遊び場面における分類表の検討が示唆された。また，異年齢保育を「保育方法」として実践している保育園や，さまざまな異年齢保育の「形態」を引き続き分析し，子どもたちに何が育つのかを検討していきたい。

引用文献

⑴ 全国保育団体連絡会・保育研究所（2014）　保育白書，　ひとなる書房

⑵ 伊藤亮子（1998）　異年齢・きょうだい保育の創造へ，　ちいさいなかま　12月号　pp. 20－25.

⑶ 仲野悦子・後藤永子（2002）　異年齢児とのかかわり–いたわりとおもいやりの心の育ち–，　保育学研究　第40巻第２号　pp. 72－80.

⑷ 渡邉保博（2012）　集団編成と保育形態の歩み，　季刊保育問題研究　第258号　pp. 8－17.

⑸ 藤下菜穂子（2014）　一歳児がいるのが当たり前の暮らし　未満児を含んだ異年齢保育季刊保育問題研究　第270号　pp106－113.

⑹ 宮里六郎（2001）　異年齢保育実践の課題と「保育計画」づくり，　季刊保育問題研究　第190号　pp. 86－101.

⑺ 島田知和（2014）　異年齢保育に集団づくりに関する一考察，　東九州短期大学研究紀要　第15号　pp77－86.

⑻ 西岡菜絵（2014）　異年齢保育での劇づくり「むしたちのおんがくかい」にとりくんで，　季刊保育問題研究　第270号　pp94－103.

⑼ 鍋田まゆ（2014）　過疎地の異年齢保育　世代をこえてつながることでエネルギーを生みだす，季刊保育問題研究　第270号 pp115－120.

⑽ 夏堀睦（2008）　縦割り保育活動に期待される学習効果，　富士常葉大学研究紀要　第８号　pp. 79－89.

⑾ 山本理絵・中川伸子（1988）　乳幼児の道徳性の発達に関する研究–乳児期の当番活動を中心として，　日本保育学会大会研究論文集　第41号　p. 374－375.

⑿ 臼杵瑞恵・賀耒結希子・神山沙織（2002）　幼児の集団発展と人格の発達についての実践的研究–5歳児のリーダー性の発展と「ちびっ子先生」について–，2001年度大分大学教育福祉科学部幼児教育学科卒業論文

参考文献

・現代と保育編集部（1999）　異年齢保育，　ひとなる書房

・林若子・山本理絵（2010）　「異年齢保育の実践と計画」，　ひとなる書房

・射場美恵子（2006）　「人と生きる力を育てる～乳幼児からの集団づくり～」，全国保育問題研究協議会　pp. 119－130.

・石川正和（1994）　「子どもの人格発達と集団づくりの探究」，　大空社

・伊藤佳世子（2006）　「毎日一緒」の積み重ねの中で，　季刊保育問題研究　第219号　pp. 16－27.

・伊藤美佳（2004）　異年齢の中で育ったＴ君～本音でぶつかりあい認めてもらう中で気持ちを切り替える～，　季刊保育問題研究　第205号　pp. 13－21.

・入江礼子・内藤知美・太田佐恵子・井上紀子・杉崎友紀・黒川愛・上田陽子・塩原紀子（2003）異年齢交流を支えるティーム保育の検討–指導計画の変容を手がかりとして–，　鎌倉女子大学研究紀要　第10号　pp. 1－9.

・伊藤シゲ子（2005）　異年齢保育の四季～生活をともにする異年齢集団の保育づくり～，　季刊保育問題研究　第212号　pp. 211－214.

・伊藤シゲ子（2006）　人との関わりを豊かに広げるために生活をともにする異年齢保育に取り組んで，　季刊保育問題研究　第219号　pp. 40－52.

・加藤さゆり・信田博子・高須真紀子・太田俊己・加藤惟一（2001）　縦割り保育を見直す　小グループを活用したクラスの広がり，　日本保育学会大会研究論文集　第54号　pp. 502－503.
・菅田貴子（2008）　異年齢保育の教育的意義と保育者の援助に関する研究，　弘前大学教育学部紀要　第100号　pp. 69－73.
・河崎道夫（1998）　異年齢のかかわりのなかで育てたいもの，　ちいさいなかま　12月号 pp. 34－39.
・夏堀睦（2007）　正統的周辺参加論の視点による異年齢保育の効用，　富士常葉大学研究紀要　第７号　pp. 171－184.
・大石八重（2011）　大丈夫！自信をもって！～年長５人の仲間たち～，　第42回　九州保育団体合同研究集会　北九州集会　提案集　pp. 100－101.
・島田知和・田中洋（2010）　異年齢保育に関する先行研究の概観，　大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要　第28号　pp119－126.
・島田知和（2012）　異年齢保育における幼児の集団発展と人格の発達に関する実践的研究，2011年度大分大学大学院修士論文
・高田清（2006）　異年齢保育という方法技術と仲間づくり，　季刊保育問題研究　第219号 pp. 81－89.
・田中摂子（2010）　共に育ちあう縦割り保育～白鳩保育園の異年齢保育～，　季刊保育問題研究　第242号　pp. 119－123.
・坪井敏純・山口郁（2005）異年齢保育の中の子どもたち，　南九州地域科学研究所所報　第21巻　pp. 1－10.
・脇信明（2005）　異年齢保育における子どもの発達に関する考察－ひめやま幼稚園における実践をもとに－，　別府溝部学園短期大学紀要　第25号　pp. 17－24.
・渡邉保博（2006）　異年齢保育の回顧と展望　季刊保育問題研究，　第219号　pp. 6－15.
・渡邉保博（2008）　意図的活動重視の保育から“生活の充実感”をめざす保育へ～ある公立保育園における異年齢保育の展開を手がかりに～，　保育学研究　第46号第１巻 pp. 71－80.
・山本理絵（1981）　三歳児未満児クラスにおける「要求の組織化」と「集団の組織化」の関連－遊び・課業における班活動の指導を中心に－，　草土文化　「保育の研究」　No. 10　pp. 53－69.
・山本敏郎（1992）　乳幼児の集団づくりをめぐる論争の検討，　金沢大学教育学部教科教育研究　第27号　pp. 17－30.
・山中澄子（2006）　異年齢保育～無認可保育所（ひまわり共同保育園）の場合～，　季刊保育問題研究　第219号　pp. 61－68.
・横松友義・安達保雄・伊勢慎・永原慎太郎・稲益かおり（2006）　異年齢保育に関する体系的研究の重要性，　岡山大学教育学部研究集録　第132号　pp. 69－76.